

再帰代名詞の換喩、提喩、隠喩についての認知言語学的アプローチ (その1) : 換喩、提喩、隠喩の定義をめぐって

鄭 基 成

1. 序

本論文ではドイツ語や英語におけるいわゆる人間名詞句、特にそのひとつの事例である再帰代名詞を伴った表現における換喩、提喩、隠喩の構造について認知言語学的観点から探求してみたいと思う。本稿ではその前提として、レトリックにおける換喩 (metonymy)、提喩 (synecdoche)、隠喩 (metaphor) の概念を明確にすることを目的とする。直喩 (simile) と並んでレトリックにおいて主要な地位を占めるこれらの表現形態についてはすでに多くの論者によって紹介され議論されており、いまさら新しく加えることはないと思えるほどである。しかし本稿であえてこれらのレトリック現象について論ずるのは、近年における主として欧米のレトリック研究においてある共通した誤解が認められ、そのことを指摘しておくことは今後のレトリック研究にとって少なからず重要であると思われるからである。それは提喩 (synecdoche) 表現の位置づけに関する誤解および理論的混同である。換喩と提喩の間には明確な理論的な相違があるにもかかわらず、しかしその違いが極めて微妙なために、多くの論者が提喩と換喩を取り違えたり、提喩を独立したレトリックのカテゴリーとしては認めずに換喩と同一視してしまっている傾向がある。また提喩と隠喩の密接な関係についても見逃されているところがある。そのため本稿では、まず佐藤 (1986) と瀬戸 (1997、2000) における認識を確認し、そのうえで、換喩、提喩、隠喩に関する代用的研究におけるやや混乱した見解について批判的に検証していくことにする。なお表題の再帰代名詞については第2部以降で分析する。

2. 換喩 (メトニミー)、提喩 (シネクドキ) 隠喩 (メタファー) の定義

以下の論述に当たって対象となる主な事例を列挙する。いずれも有名なものばかりである。

- (1) The ham sandwich is waiting for his check.
(ハムサンド (を食べたお客) が勘定をまっている)
- (2) Nixon bombed Hanoi.
(ニクソン (政府、そしてその指令を受けた軍隊) はハノイ市を爆撃した)

- (3) This is parked out back.
(これ(キー=車)は後ろに駐車してある)
- (4) I am parked out back.
(私(の車)は後ろに駐車してある)
- (5) He is a brain.
(彼は有能な人間だ)
- (6) She's just a pretty face.
(彼女はただきれいなだけだ)
- (7) Achilles is a lion.
(アキレスはライオン(のように勇敢)だ)
- (8) John is a Picasso.
(ジョンはピカソ(のような天才)だ)
- (9) Does he own any Picassos?
(彼はピカソ(の作品)を所有しているのか)

(7)は隠喩の事例といわれており、それ以外はすべて換喩の例として議論されることが多い。各例文の日本語訳を参照すればその事情が推察されよう。しかしこのうち(5)、(6)、(8)は果たして換喩であろうか。また(7)はいわゆる独立した純然たる隠喩であろうか。まず最初に佐藤(1986)における換喩と提喩の違い、および提喩というレトリックの存在を認める必要性について、その要旨を紹介する。

3. 佐藤(1986)における換喩と提喩の定義:

佐藤は、古来、提喩と換喩が絡み合う形で、あるいは提喩が換喩と抱き合わせで検討されてきた言葉のあやであるとして、提喩の表現——というよりも提喩的認識——の実態を分析するために両者を比較検討している。佐藤は十八世紀にデュマルセが上げた提喩に関する4つの基準のうちの第4のものを換喩とし、他の3つを提喩の性質として区別した、フランスのグループμの見解を取り入れている。

- 1.《類による提喩》:たとえば人間たちという代わりに《やがて死ぬべきものたち》というような場合。より小さい集合としての《種》をあらわすためにもっと大きな集合としての《類》の名を用いる表現のこと。
- 2.《種による提喩》:その本来の意味においてはある特殊なひとつの種を表している言葉が、類の意味に用いられるような場合。性悪な人間を時には《盗人》呼ばわりすることがある。

3. 《数の提喩》：複数の代わりに単数表現を、あるいは単数の代わりに複数表現を用いたり、また、ある特定の明細な数の代わりに概数を用いたりするような場合。

4. 《全体の代わりに部分を、また部分の代わりに全体を》用いる提喩：時には《頭》によって人間の全体を意味する場合がある。《一人頭につきしかじかの額を支払った》など。(175)

このような分類の上で、当のデュマルセは、二つの別々のものごと同士の外部的な隣接性が親近性による名前の貸し借り(写像関係)を(せまい意味の)換喩とし、それに対して、含有=被含有という内部的な関係にある場合、すなわち全体とその一部分という関係を提喩とし、ただし、広い意味での換喩はその両方を含むという定義が成り立つ(177)、としている。しかし佐藤によれば、隣接性と含有性を換喩と提喩の区別基準として立てることは、不可能であるばかりか、無意味でさえある。外部的隣接性にもとづく「赤頭巾」型の表現も内部的「青髭」型の表現も、まとめて換喩として扱い、換喩の本質としての隣接性という概念を大きく解釈し、外部的な隣接性と同様に内部的な隣接性をもそれに含めている。

隣接性と含有という区別を廃止して提喩という種類のあやを廃止して言語表現の仕組み全体を隠喩と換喩の二つの基本的メカニズムに還元してしまったロマン・ヤコブソンのような大学者もいることも指摘している。(179)

しかし佐藤はこのような提喩廃止論に対して、グループ μ の換喩と提喩の考えを取り入れて言語表現の提喩的構造を認定する必要性を強調している。すなわちグループ μ は全体と部分の分解法を様式と様式に区別した。

1. 様式とは全体をばらばらに分けられた各部分の《積》であり、たとえば人間は頭および手および足および腰...といった部分の論理的な積によって成り立っている。
2. 様式では、全体と部分の関係は、ちょうど類と種の関係にあり、部分同士の関係は選言的であり、互いに論理的な和の関係を形作っている。たとえば、人間という類は、日本人またはドイツ人または中国人...花子または太郎...といった部分の和集合によって成り立っている。

グループ μ は先にあげたデュマルセによる分類のうちの第4の形式が様式の表現構造に相当し、それ以外の1、2、3の形式は様式の表現であるとして、前者を換喩、後者を提喩として定義している。このように同じ全体と部分の関係でも、換喩は外部的ないしは内部的な隣接性に基づく外延的現実の構造であり、反対に提喩における全体と部分の関係は、まさに類と主の関係である、集合の含有関係である。つまり概念の外延の含有関係、別の言い方をすれば意味の構造である。そしてこれは決して換喩に還元しきれないものである。

全体を部分に分解する理解のしかたとして、佐藤はもうひとつの様式すなわち様式の存在を指摘している。これはグループ μ によって忘れられていた論理積の概念である。たとえば人間の現実

の構造というよりもその性質の集合を考えた場合、霊長類の動物かつ脳が最も発達しており、かつ直立歩行し、かつ言語を操り...という風に概念としての人間の意味全体を、その構成部分（意味素）に分解したものである。人間という概念に含まれるべき属性の全体、すなわち内包的意味を、分解し列挙したものである。(189 - 90)

4. 瀬戸 (1997) による定義

瀬戸はメタファー、メトニミー、シネクドキを以下のように定義している。

1. メタファーは類似性 (similarity) に基づく。

Time is money. 「時は金 (のように貴重) なり」においては時間と金銭の間に貴重なものという不意自生があり、それに基づいてメタファーが成立する。

2. メトニミーは現実世界に存在する「モノ」相互間の隣接性 (contiguity) に基づく。ここで「モノ (entity)」とは空間的、時間的、抽象的な個別存在を意味する。

3. シネクドキは、カテゴリーの包摂関係に基づく意味の伸縮現象であり、隣接関係に基づくメトニミーと区別されなければならない。包摂関係とは、包摂分類法 (taxonomy) におけるカテゴリーの上位下位関係である。隣接関係は、文節分類法 (patronymic) におけるAはB「の一部」、の関係であり、この二つの分類体系が原理をことにすることに留意すれば、メトニミーとシネクドキがそれぞれ独自に認定されねばならない転義表現の種類であることが帰結される。「花見」は桜という「種」を花という類で表しており、逆に「パンを稼ぐ」という表現は生活の糧一般という「類」をパンという「種」であらわしている。

このように瀬戸における換喩と提喩の理解も佐藤のそれとほぼ同じである。

このように換喩に還元されえない比喩としての提喩の存在が確認された。しかし多くの論者がいまだに提喩を換喩の一種としてしまうか、または提喩の性質を取り違えているためにこれらの比喩表現にまつわる議論において、いろいろな混乱が起こっている。当代随一のレトリシャンであるGibbsがそのよい例である。

Metonymy is closely related to the notion of synecdoche. In fact, metonymy and a synecdoche are not always clearly distinguishable, since both figures exploit the relationship of larger entities and lesser ones. Synecdoche substitutes the part for the whole, and its terms of reference are concrete. For example, people often substitute hand for worker, head for person, and door for house. These commonplace instances occur in such usages as They're taking on hands down at the factory, We had to pay ten dollarsa head just to get into the concert, and Mary Sue lives four doors down the

street. Synecdoche is quite common in colloquial usage and slang, such as when skirt is used to signify woman in John is talking to the skirt over at the bar. (Gibbs 1994. 322)

これは包摂関係という 様式の全体と部分の関係 (提喩) を 様式の関係 (換喩) と取り違えた結果起こった概念の混同である。上の例は佐藤や瀬戸の定義に従えばすべて換喩表現である。スカートは女性のみにつけるものの (目だった) 一部であり、扉は家の目立った一部である。

反対にGibbsによる換喩の定義は、再び佐藤や瀬戸の定義に従えば、逆に提喩ということになる。

Metonymy, a more subtle and productive trope than synecdoche, substitutes the token for the type, or a particular instance, property, or characteristic for the general principle or function. Pen for author, the bench for the law for command, the ballot box for democracy, the crown for the royal government, the bullet for terrorism : the powers of the crown, the dignity of the bench, The pen is mightier than the sword, They prefer the bullet to the ballot box. (Gibbs 1994. 323)

引用冒頭の定義にもあるとおり、これらの例はある概念にまつわる事例や特質を表す代表的な一例であり、たとえば「言論とペン」、「暴力と剣」の関係は、 様式の集合における全体と部分の関係であり、 様式の全体と部分の関係、すなわち換喩、とは同一視できない関係、すなわち提喩である。

くどいようであるが、念のためもう少し例を挙げておこう。

- (10) ...and many times have I gladly shared my stories with good company around a cleared dinner table. Nevertheless, there is a difference between tales told over a late-night bottle of claret and a book that any man anywhere can pick up and examine. (Liss, D. A Conspiracy of Paper. 4)

(気の合う仲間に私の物語を、食事の後の食卓を囲んで喜んで話してあげたものだ。とはいえやはり、ボルドー産の赤ワインで夜ふけまでほろ酔い気分で聞く手柄話と、いつでも好きなときに本棚から引っ張り出して読む本ではさすがに違うというものだ。) (リス：『紙の迷宮』)

- (11) I knew well how to dispose of a man of this stripe. Not with money, certainly, for to give a rascal any silver at all was to encourage him to return for more. (ibid. 5)

(この手の人間の扱いは知っているつもりだ。もちろん金じゃだめだ。こいつみたいなごろつきに銀貨など渡そうものならつけあがるだけだ。)

(日本語は拙訳による)

ここで a cleared dinner table, over a late-night bottle of claret, any silver...は提喩的表現である。片付けられるモノとしてはさまざまであるが、代表的なのはお皿やナイフ、フォークといったものであろう。ワインといえば飲みながらに決まっている。そして渡すのは素材としての銀ではなくお金だ。これらは 様式の全体と部分の提喩である。それに対して a (late-night) bottle of claretは一種の換喩であらう。飲まれるのはボルドー産のワインだからだ。

5. Ruiz de Mendoza (2000)

Ruiz de Mendoza (2000) においても、換喩と提喩（特に小文字の 様式の提喩）との混同が、微妙ではあるが、認められる。Ruiz de Mendozaは換喩を隠喩との比較において以下のように定義づけている。(113)

1. 隠喩が二つの概念領域 (domain) 間の写像関係であるのに対して、換喩は単一概念領域内での全体領域 (matrix domain) と下位領域 (subdomain) の間の写像関係である。この場合写像関係とは概念の貸し借りあるいは流用関係のことである。この定義は基本的には Lakoff & Johnson (1980 : 36) の定義に従ったものである。
2. 換喩の定義としてよく言われる「指示的使用」(referential use of metonymy) とその副産物である「代理関係」(stand-for relationship) は、それが換喩の主な機能ではあるものの、独占的ではないので、換喩の定義に本質的な基準ではない。
3. 写像関係に関して2つのタイプの換喩的写像がある。
 - (i) ソース=イン=ターゲット=メトニミー (source-in-target-metonymy) :
これは部分から全体への写像関係である。
 - (ii) ターゲット=イン=ソース=メトニミー (target-in-source-metonymy) :
これは全体から部分への写像関係である。

定義2の「指示的使用」と「代理関係」との関連で Ruiz de Mendoza は換喩の指示的使用 (referential use of metonymy)、述語的使用 (predicative uses of metonymy)、単項相関メタファー (one-correspondence metaphor)、多項相関メタファー (many-correspondence metaphor) の4種類の写像関係の存在を指摘し、それらが連続的な関係にあるという。

1) 換喩の指示的使用 (referential use of metonymy)

(3) This is parked out back.

(これ (キー = 車) は後ろに駐車してある)

- (4) I am parked out back.
(私 (の車) は後ろに駐車してある)
- (12) Proust is hard to read.
(ブルースト (の作品=小説) は読むのが難しい)
- (1) The ham sandwich went out without paying.
(ハムサンド (を食べたお客) が勘定をまっている)

換喩の指示的機能を強調したのはNunberg (1995) である。(3)はNunberg (1995 : 111) では deferred indexical reference (保留直示) といわれており、(4)はpredicate transfer (述語変移) の例である。(3)のThisが (手に持った) 車のキーを指し、それが帰属する自動車を指示する。このタイプは上で述べた1) の写像関係、すなわち「キー」という下位領域が上位領域である「自動車」に写像されていると見ることで、「駐車してあるのが自動車である」、という聞き手の正しい理解を説明できる。

This=the key : a subdomain (source) of the car
(target) source-in-target-metonymy

反対に(4)では「持ち主」という上位領域がソースとして下位領域である自動車というターゲットに写像されていると見ることができる。

the car (subdomain) of I (source) target-in-source metonymy

(11)、(1)は換喩として名高い例であるが、Proustという作家 (上位領域=ソース) が作品 (下位領域=ターゲット) に写像されており (target-in-source)、the ham sandwich (下位領域=ソース) はそれを注文し食べたお客 (上位領域=ターゲット) に写像されている (source-in-target)

2) 述語的使用 (predicative uses of metonymy)

Ruiz de Mendozaは述語的使用への傾向が換喩の重要な性質であることは認めつつも、それは必ずしも換喩の定義にとって必要な条件ではないとして、以下のような例を反証として持ち出している。

- (5) He is a brain.
(彼は有能な人間だ)
- (6) She is just a pretty face.

(彼女は美人であるに過ぎない)

(8) John is a Picasso.

(彼はピカソ (のような) 天才だ)

これらの例における a brain, a pretty face, a Picasso は確かにそれらを部分とする人や隣接関係にある作品を指示しているものではなく、おのおの名詞が、文の主語のある内包的特徴を現している。ところで、これらの表現は果たして換喩なのであろうか、という根本的疑問が沸き起こる。結論から先に言ってしまうと、これらの表現は実は、少なくとも上で佐藤と瀬戸に従って定義した意味での換喩ではなく、むしろ Ruiz de Mendoza が次に 3) としてあげている単項相関メタファー (one-correspondence metaphor) に近いものである。いやもっと正確に言えば、これは上で 様式の提喩と表裏の関係にある表現形態、すなわちスモール 様式の提喩なのである。つまり本来の換喩である大文字の 様式が現実の構造としての全体と部分や隣接性における大小の関係に関わるのに対して、小文字の 様式の提喩は意味の大小関係に関わるものなのだ。したがってこれらの表現が述語的であるのは自然なことである。(6)の'face'は単に人間の一部分であるのではなく、ある特定の顔の特徴を備えた人間という全体概念に写像されるのである。

また(8)の John is a Picasso を(9)と比較してみれば、おなじ a Picasso が同等の資格で換喩であるとはいえないであろう。

(9) Does he own any Picassos?

(彼はピカソ (の作品) を所有しているのか)

前者は隣接する作品を表し、後者は John が有する性質のひとつを表している。佐藤 (1986) が提喩を巡るグループ μ の誤謬、すなわち、「 (固体の現実的な組成としての全体と部分) および (概念の外延の意味としての全体と部分) というに系列に区別した上で、なおかつ 様式の全体と部分においてもまた意味の大小関係は本質的に重要であると思い込んでしまい、提喩という大小関係に関わる比喩には、 様式と 様式の二つのタイプがある...と主張し始めた」(187) ことに考え違いがあることを指摘しているが、おなじことが、Ruiz de Mendoza にも当てはまるように思われる。同様の混同は Ruiz de Mendoza (2002, 497) における以下の例においても見られる。

(13) She's taking the pill. ('pill' for 'contraceptive pill')

(彼女はピル (避妊薬) を飲んでいる。)

これは典型的な 様式の提喩であり、《類》(pill) が《種》(contraceptive pill) を表している。写像関係についていえば、(5)、(6)はソース=イン=ターゲット (部分から全体へ) の写像であり、(13)はターゲット=イン=ソース (全体から部分へ) の写像である。ただしこの場合は純然たる換喩

とは違い、あくまでも 様式の提喩における全体と部分という意味においてであることを忘れてはならない。

4) 単項-相関メタファー (one-correspondence metaphor) の例としては次のような例が挙げられている。

(7) Achilles is a lion.

(アキレスはライオン (のように勇敢) だ)

(14) The pig is waiting for his bill.

((レストランで、態度の悪いお客を指して) あの豚 (のように態度の悪い) 客が勘定を待っている)

(14)は、指示機能は換喩の専売特許ではなく隠喩も指示的に使用されることがあることを示すための例である。確かに指示的に用いられるのは換喩に限られないとは言えそうである。一方(7)は 様式の提喩と表裏をなす隠喩の形式であり、この例は「勇敢なアキレス」 (類の提喩)「勇敢な動物」 (種の提喩)「勇敢な動物の一種であるライオン」という二重の提喩的写像によって得られるものである。そして(14)も(7)と同様の写像プロセスを経て成立した 様式の提喩であり、したがってその裏返しとしての隠喩であることも確認しておこう。

これはLakoffの言う比喻の大連鎖 (GREAT CHAIN, GENERIC IS SPECIFIC-metaphor) に相当するものである。換喩との違いは写像関係が複数の概念領域 (domain) の間の写像であるということである。ところで(7)に似た比喻として(15)や(16)がある。

(15) He is a Hitler.

(ヒトラー (のような独裁者) だ)

(16) He is a Don Juan.

(ドン・ファン (のような色事師) だ)

これらも《種》による提喩であり、古典レトリックにおいて換称 (アントノマーズ) と呼ばれていたものである。その比喻は固有名の代わりに同類一般をあらわす名称を用い、あるいは逆に、同類一般を表すために固有名を用いる、提喩の一種である。(佐藤1986. 211-2)

4) 多項相関メタファー (many-correspondence metaphor)

これはたとえばつぎのような基本的な隠喩構造に依拠して生じるさまざまな隠喩表現のことである。

- (21) LOVE IS A JOURNEY
- (22) TIME IS MONEY
- (23) ARGUMENT IS WAR

これらの概念的隠喩を元にさまざまな表現のヴァリエーションが生み出されることに関しては Lakoff and Johnson (1980、1999) をはじめ多くの文献で紹介され議論されているのでここでは立ち入らない。

6. まとめ

本稿では換喩（メトニミー）、提喩（シネクドキ）、隠喩（メタファー）について、佐藤（1986）および瀬戸（1997、2002）を基本におき、Gibbs（1994）、Ruiz de Mendoza（2000、2002）における換喩と提喩、さらに提喩と隠喩の関係に関する認識の誤りについて指摘しながら、基本的な定義を再確認した。これは表題のテーマである人間名詞句としての再帰代名詞のレトリック構造を探究する上で不可欠のものである。そのほかにも論ずべき次のような重要な問題点がある。

- 1) われわれはなぜこのような換喩、提喩、隠喩といった表現形態を自然に理解することができるのか。
- 2) おのおののレトリック形態における概念領域間の写像関係とは具体的にどのようなものなのか。

これらの問題については第2部以降における人間名詞句のひとつの事例である再帰代名詞のレトリック構造の解明を進める中で述べていきたいと思う。

参考文献

- 佐藤信夫「レトリック感覚」講談社学術文庫1986
- 瀬戸賢一「意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』研究社1997
- 瀬戸賢一『メタファー思考』講談社現代新書2002
- 吉田有『ドイツ語において人間名詞句が果たすメトニミー機能』上智大学『外国語学部紀要第38号』2003. p.1-28
- Gibbs, Raymond W., 1994. *The Poetics of Mind: figurative thought, language, and understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jakobson, Roman, 1979. *Poetik Ausgewahlte Aufsätze* Frankfurt am Main
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago/London :

University of Chicago Press.

-----, *Philosophy in the Flesh. The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought.*

New York : Basic Books

Ruiz de Mendoza Ibanez, Francisco Jose 2000. 'The role of mappings and domains in understanding metonymy,'. In Barcelona, Antonio. (ed.) *Metaphor and Metonymy at the Crossroads.* pp 109-132

Ruiz de Mendoza Ibanez, Francisco Jose and Olga Isabel Diez Velasco, 2002. 'patterns of conceptual interaction'. In Dirven, Rene and Ralf Porings. (eds.) *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast.* 2003. Berlin, New York. Mouton de Gruyter. pp. 489-532